

## 34 きよの住む部屋 2

星野博美

真っ暗な部屋で、祖母がテレビの前に座っている。

テレビの箱が発する青白い光が逆光になって、祖母の後ろ姿を照らしだし、後光が差しているように見える。イヤホンを差しているから、まったく音はしない。それを私はふとんの中から見ている。

画面が切り替わるたびに、ブラウン管からは赤い光や黄色い光が発せられ、暗い部屋に置かれたさまざまな物にスポットを当てる。

誰か(たぶん、祖父)が北海道に行った時のお土産の、重い熊の木像。誰か(たぶん、祖母)が山形から買ってきた、こけし。額に入った祖父の写真。祖母が買った博多人形。白い布に包まれた箱。叔父が新婚旅行に行ったお土産の、グアムの木彫りの人形。みんな黙っている。そこへ線香の煙が漂ってきて、映像に雲をかける。

祖母が大切にしている桐箆笥。ガラス細工のほどこされた飾り棚。祖父がものを書く時、漁師の親戚が集まって宴会をする時、使っていた、大きな机。

おばあちゃんの部屋にあるものは、みんな、古くて、木でできている。おばあちゃんと同じぐらい、年をとっている。

そこに一つだけ、場違いなものが転がっている。私の、赤いランドセ

ルだ。黄色や青い光に交互に照らされて、本来の色調を失ったそのランドセルは、死んでしまった、どこかの子どもの遺品のように見えた。

「しばらく、おばあちゃんのところまで暮らしてやってくれ」

父からそう言われたのは、ある日の朝の食卓だった。

「おばあちゃんが寂しがってるからな。わかるだろ？」

すぐさま、子どもなりのズル賢い損得勘定を始めた。祖母のところまで暮らすと言っても、二階の子ども部屋から一階に移るだけのことだ。別に親や姉たちと引き離されるわけではないし、学校も変わらない。

おばあちゃんと暮らせば、年子の姉からのちよっかいから解放される。ひいきしてもらえる。親に内緒でお菓子とか買ってもらえるかもしれないな

いし、それにおばあちゃんの部屋には子ども部屋にはないものがある。

テレビだ！ 夜遅くまでテレビが見られるかもしれない。

これは分の悪い提案ではなさそうだ。

「うん、いいよ」と元氣良く答えた。

すると父は安堵の表情を見せ、心なしか急に優しくなったように見えた。

その日から早速、祖母の部屋で暮らすことになった。

祖父の葬儀が終わった翌日のことである。

胃癌に侵された祖父は長いこと自宅で療養生活を送り、家で息を引き取った。葬儀も家で行った。祖父の死にまつわる出来事は、すべて家で発生した。

そのこと自体は、昭和の時代にさして珍しいことでもなからう。特別な体験をしたとは思わない。幼い自分に決定的な印象を残したのは、火葬場の存在だった。

うちから、子どもの足でも歩いていける距離に桐ヶ谷火葬場はある。祖父の入った棺は、父が奮発した立派な霊柩車で火葬場へ運ばれ、そこで骨と灰になった。私は、祖父が特別にかわいがっていた甥の漁師、巖いわおさんと同じ箸で祖父の骨を拾った。

そして帰りは、「子どもは車に酔うから」という理由で車に乗せられず、巖さんと一緒に歩いて家に帰った。

生きていた祖父が火葬場で決定的な死者となり、その証拠である骨を持って、歩いて帰る。その骨が置かれる場所は、もちろん、祖母きよの

部屋だ。

それはまるで、死を家に持ち帰るといった感じだった。

静まりかえった祖母の部屋は、祖父の存在が減ったというより、死という現象が増えた空間に見えた。そこで祖母と、祖父の骨と、一緒に暮らし始めた。八歳だった。

当時の家は、銭湯の風呂のようだった。熱く煮えたぎった、面積の広い風呂と、冷たい水の入った、狭い風呂。二階は両親と三人の子どもが暮らす、生命力にあふれた熱い風呂。一階は祖母ひとりが残された、死の気配が充満した冷たい風呂。祖父の存在が消えた家は、温度差がありすぎる二つの風呂だった。

家に生じた著しい不均衡に対して、何か早急に対処が必要だと父は考えたのだろう。そして考えついたのが、互いの湯温を近づけることだった。体温の最も高い人間を下へ派遣し、二階の温度を下げ、一階の温度を上げる。それには、生まれてから経過した時間が最も短い人間——つまり私——が最適だった。

何事も母と協議することの多い父だが、これだけは独断で決めたものだ。だと私は想像する。母がこの提案に賛同するわけがない。

「おばあちゃんが寂しがってるからな」

長男として、精一杯の親孝行だったのだろう。

二つの世界に生きる住人が交わるのは、一階の隅にある食卓だ。

三世代が同居する家では、第一世代と第二世代は遠慮しあい、互いの

空間を行き来しないものだ。それが同居を円滑に進める秘訣でもある。第三世代の私はもともと一階に行く機会が多かったが、一階への移住という大義名分を公式に得たことで、大手を振って二つの世界を行き来することになった。一番小さいくせに、家じゅうで最も広いテリトリーを獲得したのだ。動物世界では考えられないことである。

食卓で両親は、私がペラペラしゃべる一階の状況を、何気ないふうを装って、しかし実際には注意深く聞いている。二階を支配する掟が一階では効力を持たず、末っ子が治外法権におかれることを恐れているのだ。最初にして最大の失敗は、テレビだった。いまでも、言わなければよかったですと後悔している。祖母にひいきされていることを次姉に自慢しようとして、つい吹聴してしまった。



「おばあちゃんは、好きなだけテレビ見させてくれるもんね」

これで一発、レッドカード。多少の菓子の買い与えや連れ歩きには目をつぶるが——それらはこれまでも許容されていた——、両親にとってテレビの自由化は、重大な主権侵害と映った。しかし祖母のテレビ視聴まで禁じるわけにはいかない。それこそ、親孝行のつもりが親不孝になってしまう。協議の結果、「九時には消灯すること」「そのあと、おばあちゃんはイヤホンを差してテレビを見ること」というルールが一階に強制されることになった。

皮肉な話である。私がいなければ、祖母は誰に遠慮することもなく、こうこうと灯りを点け、音を出して、深夜まで好きなだけテレビを見ることのできた。

ブラウン管が発する様々な光に照らされた、無音の、奇妙な部屋は、私という闖入者がもたらした産物だったのだ。

おばあちゃんはテレビに釘づけ。ドラマに夢中で、けっして後ろを振り向かない。後ろで人形たちがスポットライトを浴びていることを、全然知らない。

鮭をくわえた熊の置物にスポットが当たる。

「やったぜ、鮭をとりました」

山形のこけしが照らされる。

「すごいわ、くまさん」

博多人形はすまし顔で「ふん！」。

おじいちゃんの写真がスポットを浴びる。おじいちゃんはやべらな  
いので、次いつてくください。

グアムの人形は、熊にライバル心を燃やす。「俺だつて！」

「あんたは何をとるの？」と博多人形が尋ねる。グアムの人形は答え  
ない。

お骨の入った箱が照らされる。あ、その人もしやべりません。なんて  
いうか、骨だからしゃべれないのです。次いつてくください。

「あんた、にやにやしすぎよ」と博多人形がこけしにケンカを売る。

無音の世界でひとり遊びに興じる日々が続いた。

(つづく)